

東北大学附属図書館報

木這子



BULLETIN OF
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

宮城県沖地震と附属図書館

発生日時 昭和53年6月12日午後5時14分
震源 北緯38度10分、東経142度14分
宮城県牡鹿町金華山東沖約60kmの海底、震源の深さ約25km
地震の規模 マグニチュード 7.4
仙台での観測データ

震度 5 (強震)
最大振幅 東西 5.88cm 南北 6.8cm 上下 不明
地震の加速度 420ガル
有感地震 本震後 2時間20分の間に26回

(震源は東北大学理学部地震予知観測センターの数値によったので気象庁が暫定的に発表したものと相違がある)

本館における地震の被害

地震・その時

その日、6月12日、名古屋大学図書館の平部長(前本館整理課長)がこの春までの長い年月を過したこの図書館を初めて公式訪問されており、丁度地震のあったその時刻には整理事務室の一隅で私達と談話されていた。17時15分、6分前の前震(震度3)とは比較にならぬ強い震動が私達を襲った。100万冊収容の巨大な地下書庫をもつ建物全体が鳴動する激しい揺れが続いた。

3分程の長さにも感じたその間に多くの被害が起っていたのである。私達の目前では、いくつかの書架が連続する激しい震動に耐え切れないうちにゆっくりと倒れ、180cmの高さの重いカード箱が、三段重ねの最上段が切離れる恐れもあるほどに激しく揺れ、その上に積まれていた整理中の図書がバラバラと落下した。大ホールに出ると粉煙が漂っており、瞬間天井灯の落下が起ったのかと錯覚したほどであるが、高い天井では多くの水銀灯の大きな球形のグローブが振れていた。後で判明したことであるが壁面塗装材がはがれて粉煙と

なり立ち込めていたのである。この衝撃の十数秒、館内にいた職員は机の下、壁際、素早い者は館外へ、ある者は倒れかかる備品を押えるなど、各自難を避けることで精一杯であった。この時間、開架閲覧室は時間外開館中で多数の学生が居り、その誘導が必要なため、私はまだ余震の続く大ホールの水銀灯の下を走り抜けて、停電した同閲覧室に至り、カウンター勤務中の2名を指示して緊急閉館をハンドマイクで通報し、17時半頃にはほぼ利用者全員を無事退去させることが出来た。同室では開架図書が約1万冊書架の間に散乱しており、落下する本による人身事故が学生にも館員にもなかったことは幸いであった。学生は総立ちとなっていたが、大声を発したり館外に走り出たりする者がなく、職員の指示を待っており、本館は緊急事態にも安全と考えているのか、揺れがおさまったあと、停電していなければ再び自席に戻ろうとする気配もあった。

被害状況

マグニチュード7.4の今回の地震は仙台では震度5の強震であったが、東北大学にも各種の被害をもたらした。附属図書館本館における被害の状況は、書架については倒伏、破壊、文書用書棚の倒伏、図書の落下、建物内外の壁面の亀裂であり、二次的被害として停電、上水道停止、ガス停止であった。

図書館建築の一部として固定された書架には倒れたものはないが、固定されないものが十数本倒伏した。しかし使用不能となったものはわずか一本であった。倒れた事務室の書架は東西、地下書庫のは南北の方向におかれていたものが多かった。2段重ねの文書用書棚数本が倒伏し上段ガラスが破損したが、これらは事務室にあるものであり、5時以前の執務時間中であれば職員の人身事故発生の恐れがあった。整理事務室の三段重ね180cmのカード箱も最上段が震動しなからずれが大きくなって行ったが近くの職員が押えたことにより落下を防ぐことが出来た。

図書の落下は開架閲覧室のものが約1万冊、地下書庫では約6千冊が書架の間に落下した。倒伏した書架上の図書も全て落下し、特に貴重書庫1は書架6本が倒伏したこともあって漱石文庫資料



(本館) 開架閲覧室

がほとんど落下した。落下した図書自体は殆んど破損がなく、全てで10冊以内の洋装本の背表紙が一部はがれた程度でこれも修理可能なものであった。建物内外の壁面、柱の亀裂は多数あるがそれらはおおむねが柔構造である建築物の特徴ということである。建物破損による図書館機能への影響は現在のところ無いと言えよう。

またある学部7階におかれた16本の貴重書収容の特製書架は、木製で重量のあるものであるが、下に置かれた台座に重い書架を乗せただけのもので、台座を残して全てが将棋倒しに倒壊した。4階にある学部図書室では、書架の鉄柱の下部をゴム状のストッパーで仮固定してあった多数の書架が上部のアングルによる連結にもかかわらず将棋倒しになり、完全に破壊されてしまった。

復旧作業と開館

翌13日と14日は交通の混乱と自宅の被害にもかかわらず多くの職員が出勤し、両日にわたり全員の協力で復旧作業を行った。その手順は、被害状況調査、写真記録を慎重に行ったのち事務室の復旧を行い、引き続き司書系職員全員により開架閲覧室、地下書庫の落下図書の整備を集中作業により行った。14日中に水道、電気が復旧し15日(木)9時に全面開館できるところまでこぎつけたが、附近の水道管破裂が発見され、9時半に断水となったことにより、再度閉館の止むなきにいたり、16日より通常の開館を行うことができた。教育・法学・経済の各図書室は、被害が大きいこともあり、本館より1週間以上も遅れて業務を開始

した。

まとめ

地震が発生した時点では、図書館職員はガス栓停止を当然としても、各自が緊急に難を避けることが必要で、数秒以上の余裕はあることから、2段重ねの重い備品や単独書架など動きの激しいものや電灯などの落下物をよく見定めて、図書館全体は安全であることを冷静に考え、落下物のない場所へ数米でも移動することであろう。図書館では、重量ある備品の倒伏があることから、机の下でも足の弱い机では危険であろう。次に利用者がいる場合は揺れもどしや二次災害にそなえて、緊急館外退去・閉館を迅速にハンドマイク等で指示することである。

当館の場合、去る2月20日の震度4の地震のときの停電の経験が非常に役立ったように考えられる。地震については百万言を費すより、経験がものを言うようである。

本館以外でも宮城教育大学や東北福祉大学の図書館建築としての書庫においては何れも書架倒伏はなく、多数の図書の保管は図書館建築の一部としての積層書架が最も安全であることがわかる。研究棟で多数の図書を架蔵する場合は書架の形態及び固定方法に充分の注意を払う必要がある。特に4階以上の階層では、上部のアングルを構造壁柱、天井等に固定する必要がある。それにしても図書の落下は防止できないので、個人用研究書と借用図書を多数手元におく研究者は落下後の再整理に苦労を経験することとなろう。(閲覧課長)

医学分館における地震の被害

6月12日に発生した宮城県沖地震による被害は、本学においても調査が進むにつれて施設、備品関係等、相当の額に上ることが判明してきているが、当館においても書架の倒壊をはじめとし、落壁、床面の亀裂、各種備品類の破損など被害額は当初の見込みを大きく上まわることが明らかになってきている。

以下、当館の被害状況を列記することにする。

＜閲覧スペース＞

- 一般閲覧室：落壁1ヶ所(3.70m×0.35m)
- ブラウジングルーム：落壁1ヶ所(5.30m×2.00m)天井落下1ヶ所(2.00m×3.00m)
- 蛍光灯落下1ヶ所
- 視聴覚室：落壁1ヶ所(0.40m×1.00m)
- 研究個室室：落壁2ヶ所(0.50m×0.70m)
- (2.60m×0.70m)雑誌架倒壊2本、衝立倒壊2枚

＜書庫スペース＞

- 和文誌書庫：書架横倒66本(単柱式書架)
- 欧文誌書庫：書架横倒14本、蛍光灯落下1ヶ所
- 臨時書庫(旧耳鼻科)：書架横倒57本

臨時書庫(旧精神科)：書架横倒21本
雑誌架室：落壁(4.20m×0.60m)



医学図書館臨時書庫(旧耳鼻科)の一室

＜パブリックスペース＞

- 3階廊下部分の落壁 (1.20m×2.00m)
- 3階廊下階段部分の落壁 (2.60m×0.70m)
- 1,2階コンクリート床面亀裂

＜備品関係の被害＞

図書運搬車2台、卓上電算機1台、机上整理箱1台、事務室蛍光スタンド1台、館内放送用インターホン受話器2台等

以上が、施設、備品関係類の被害であるが、復旧のために閉館した日数が5日間、相互貸借など一時停止した業務を考えれば、今回の地震被害による影響はまことに大きかったと言わざるを得ない。
(医学分館リポーター・吉川和幸)

工学分館における地震の被害

工学分館及び12学科図書室の被害は、書架の倒壊・傾斜(複柱式5連)33本、図書の散乱17,600冊、破損図書324冊等である。

被害の約半数を占める金属系三学科図書室(地上6階)においては、4日間の休館で平常業務に戻ることが出来、金属系以外の各学科図書室、中央図書室(工学分館)も僅か1日～2日の休館で平常業務に戻ることが出来たが、これらはみな、研究室・実験室等の被害をも省みず復旧作業に御協力下さった教職員、学生の理解とご苦労があったからである。

今年2月20日の大船渡沖地震で全学の図書館(室)の被害が幸いにも少く、書架等に対する補強対策の検討がなされなかったが、このことが、今回の歴大な被害を招いた原因と考えられる。

工学部では、電気系、資源、原子核の各図書室で既にアングルの取替、壁への取付等の書架補強を終了している。

機械、機械第二、土木、建築の各図書室は、全部の書架が、倒壊こそしなかったものの、傾斜し危険な状態にあり、高さ276～281cm(図書の出納にハンゴ使用)の大きな書架に配架してある資料の重量を支えるための補強の方法等について現在検討中である。

今回の地震被害を参考に図書館職員は、今後起ると予想される地震に対し被害を最少限度にとどめる何らかの対策を考えなければならないと思う。
(工学分館リポーター・佐藤定夫)

農学分館における地震の被害

6月12日のM7.4の地震は農学分館にも多大の被害を与えた。プレハブ造りの事務室は、書棚が倒れ机上の物が散乱した程度であったが、書庫は目も当てられない程に荒廃した。

1階のカードケースは倒れて引出しが飛び出し、水平でない床に据置いたスチール書架は台が曲りくねり、その間に書架の上部3段の図書が交錯して飛び散り、床下70センチまでが本で埋め尽され、その上に蛍光灯やガラスの破片が散乱し手もつけかねる状態であった。

新着雑誌や交換・受贈で入手している雑誌千数百種を収容したビジョンホール式の雑誌棚は全部倒れ、中の未製本誌は飛び出して入り乱れ、つい最近汗だくで整理したその苦労も水泡に帰した。

追討ちをかけるように、断水、ガス供給ストップ、つづいて室温33～38℃に達する猛暑の中での復旧作業は困難を極めたが、17日には一応終了し、被災後1週間で開館することができた。これは、地震直後早速駆けつけて生の被害状況を見られ、早速応援アルバイト12名の手配をして下さった農学部長、農学部事務長のお蔭であり、その御好意は終生忘れることはできない。

今回の地震は書庫閉鎖後であったため人身事故を起さずに済んだものの、いつまた発生しないとも限らない。今回の書架倒伏の状況等を詳細に検討し、本学附属図書館としての地震対策を早急にまとめ上げて、図書館だけではなく、各研究室架蔵書も含めてその保全についての指針を出すべきではないだろうか。

学部パワーセンターの昼夜に亘る努力にも拘らず、水、ガスは未だストップしたままで、プレハブ事務室のウダルのような暑さの中で、来春完成予定の新農学図書館を夢見ながら業務に追われている。
(農学分館リポーター・米倉進)

図書館利用オリエンテーションの実施

新入生に図書館及び図書館資料を上手に利用してもらうことを目的として、今年も4月11日(火)から13日(木)までの3日間、標記のオリエンテーションを附属図書館視聴覚室に於て実施し、542名の参加があった。

さらに、今回は初めての試みとして、大学院学生の図書館利用を助けるためのオリエンテーションを、5月10日(水)から12日(金)までの3日

間、同じ会場で実施した。今年は準備の遅れから5月に実施することになったが、理工系大学院学生も含め50名の参加があり、活発な意見や質問が出された。いずれも会場でのカラスライドによる図書館全般の説明のあと、館内を案内し、実際の利用を想定して、図書館が提供できるいくつかのサービスを詳しく説明し、理解と協力を求めた。

第9回国立大学図書館東北地区協議会

標記の協議会が去る5月19日、20日の両日、本学の当番により開催された。

当初は4月18日、19日の両日を開催日として準備を進めたのだが、当日に交通ストが行われることから急遽変更したものである。

協議会要旨は次のとおり

報告事項

- (1) 第25回国立大学図書館協議会総会日程(案)等を配布資料により説明
- (2) 5月9日～12日まで箱根で開催された日英図書館セミナーに出席した本館長尾事務部長から、その模様について報告が行われた。
- (3) 本学医学分館松川事務長から、JOISのデモンストレーションが去る10月10日に行われ、昭和54年1月からターミナルが医学分館に置かれ、サービスが開始されるという報告がなされた。
- (4) 宮城教育大学大塚図書館長から全国教育系図書館協議会の活動状況が報告された。

確認事項

国立大学図書館協議会理事館、地区連絡館、及び所属部会、並びに次期当番館を次のとおり確認した。

理事館 岩手大学附属図書館—第1部会所属
〃 東北大学附属図書館—第2部会所属

地区連絡館 東北大学附属図書館

次期当番館 弘前大学附属図書館

協議事項

- (1) 前述の開催日変更により予め連絡館、理事館協議の上で作成し書面をもって地区内各館の了承を得た第25回国図協総会に提出する分科会テーマ(図書館維持費の増額、職員の増員、機構整備の強化と待遇改善、図書館施設の基準改訂)について説明が行われ、総会における対応について協議した。
- (2) 東北大学医学分館が医学、薬学の分野で東日本地区における外国雑誌の共同利用の拠点校として文部省の外国雑誌購入予算第2種を要求することにつき協議し、本協議会の要望事項とは切りはなして、東北大学から文部省に要望することが了承された。

その他

図書館施設の基準改訂要望の参考として、現行の必要面積基準表の算定基礎について説明が行われた。

談話題

弘前大学から提出された外国出版物で相場変動のあった場合(前金払契約)の契約金額変更、及び外貨の換算率について各大学の実情報告と意見の交換が行われた。

第25回国立大学図書館協議会総会

日 時：昭和53年6月14日(水)—16日(金)

場 所：筑波大学、国立教育会館筑波分館

出席者：和田館長、長尾事務部長、玉木整理課長

標記の会議は関東地区の筑波大学が当番館となり開催された。例年の通り、全国国立大学の附属図書館長、事務(部)長(筑波大は図書館部長)、課長等及び文部省学術国際局情報図書館課から遠山敦子課長、田中久文専門員、西森弘行大学図書館係長が参加、総勢200名を超える大会議であった。

総会は協議会の一般的な経過報告、各地区協議会報告、図書館機械化、大学図書館改善、図書館相互協力の三つの調査研究班報告、大学図書館基本問題特別委員会報告、協議会賞(旧岸本奨励賞)選考委員会報告(本年度該当者なし)、役員の選出などがあった。また本年度は特に図書館短期大学松田智雄新学長のあいさつ(元東大館長、経済地理学)があり、文部省の遠山課長から「大学図書館行政の現状と課題」について今後の施策の説明があった。

研究集会は「大学図書館の相互協力とネットワ

ーク」をテーマとして、中山和彦(筑波大教授、同大学術情報処理センター長、文部省学術調査官)、松村多美子(図書館短期大学助教授、文部省学術調査官)両氏の講演を中心として行われた。

分科会においては、第1分科会は主として「国立大学図書館の必要面積基準について」の検討資料に基づいて、本館の長尾事務部長の説明を中心として討議が行われた。第2分科会は主査である本館の和田館長を中心として、予算、人事に関する多くの複雑多岐に亘る提出議題を各問題点を明確化し、効率的に俊敏に整理、とりまとめられた。第3分科会は京大林館長および旭川医大小野寺館長の主査のもとで、主として時間外開館について、一般的事項、図書館の環境、周囲の事情、勤務体制、経費などについて熱心に討議され、施設設備の条件としての冷房設備に対する施設基準関係の問題点も検討された。

全体会議において、各分科会の討議の結果のとりまとめが行われ、次期会場として近畿地区が決定したが、その場所、日時等は後刻決定することとなり、筑波大高橋館長の閉会の辞があり、閉会した。(整理課長)

東北大学附属図書館蔵書統計

—昭和53年5月1日調—

昭和52年度図書受入冊数

単位は冊

種 別 部局別		購 入 図 書			受 贈 図 書			合 計		
		和漢書	洋 書	計	和漢書	洋 書	計	和漢書	洋 書	計
本館	図書部 教養部 学 部 学									

注：管理換の増減は無し

昭和52年度図書費決算額および受入冊数

部局	支出額	受入冊数
	千円	冊
附属図書館	337,593	56,524
医学分館	77,292	9,137
工学分館	63,337	6,745
農学分館	23,442	3,527
全学合計	501,664	75,933

全学蔵書冊数 (昭和53年4月1日現在)

部局	和漢書	洋書	合計
附属図書館	785,866	682,773	1,468,639
医学分館	88,478	143,135	231,613
工学分館	90,330	93,089	183,419
農学分館	55,613	34,181	89,794
合計	1,020,287	953,178	1,973,465

東北大学記念資料室だより

6月22日は本学の創立記念日である。今年は数えれば第71回にあたる。当時は「大学」とか「大学校」という名をつけた専門学校は私立に幾つかあったけれども、正規の大学はドイツのまねであろうか国立に限られ、国立という意味で「帝国大学」といい、東京・京都の両先輩があるだけであった。当時の官報をみると、勅令として、
朕東北帝国大学ニ関スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十年六月二十一日

内閣総理大臣 侯爵 西園寺公望

文部大臣 牧野伸顯

勅令第二百三十六号

第一條 仙台ニ帝国大学ヲ置キ東北帝国大学ト称ス（以下略）

とある。明治天皇の睦仁という名が署名された。六月二十一日に勅令が公布され、二十二日の官報に掲載された。この場合周知された二十二日をもって発効日とし、創立の日とし、これを記念して今日に及んだのである。

木這子の編集に分館リポーター制を採用

館報「木這子」は昭和51年4月創刊されている通巻10号に達した。一方附属図書館の組織・機構と管理・運営については昭和52年7月の評議会において「本館と分館の関係について」の商議会答申が承認され（木這子 Vol.2 No.3参照）、更に昭和53年4月には3分館制が実現した。

これを機会に、木這子の編集にあたり、各分館に関する記事をも掲載して一層の充実をはかるため、編集委員会要項の一部を改正して「分館リポーター」を置くことになった。

この程、下記3名の職員が分館リポーターとして附属図書館長より委嘱されたが、今後木這子誌上に各専門別分館としてのそれぞれの活動状況等の報告が期待されている。

医学分館リポーター	吉川 和幸
工学分館リポーター	佐藤 定夫
農学分館リポーター	米倉 進

第6回東北地区中堅係員研修に参加して

閲覧課相互利用掛 阿部佳市

6月6日から16日まで、途中、宮城県沖地震の騒然とした中、本館から3名（細谷伸枝、星政則筆者）と東北各地から計72名の参加者で仙台合同庁舎において行われた。主催は人事院東北事務局である。研修は国家公務員制度全般に渡るが、その内容については省き、筆者の感じたことについて述べたい。第一は研修が、直接図書館業務と関係はないが、特に組織で働く者として職場におけるコミュニケーションの重要性について考える上で大変参考になった。即ち組織の中で仕事をする場合、上下の関係についての認識は必要だが、単なる上意下達だけが業務遂行の唯一の手段ではなく、職場のコミュニケーションがもっとも必要で、図書館組織ではなおさらである。

こうしたコミュニケーションを基に図書館が一体となって利用者へのより良いサービスを考えるべきだと思う。第二に公務員と図書館員の唯一の共通点は「全体の奉仕者」と「利用者サービス」ということにあると思う。図書館員は図書館のもつ全ての機能を全ての利用者に平等にサービスしなければならない。しかし人員不足が利用者の満足するサービスを阻んでいることは明らかである。最後に、公務員法と憲法の関係で、公務員制度の中で公務員＝労働者としての権利のいくつかが制限されていることに対する明解な回答が得られなかったことは、非常に残念なことだと思った。

お知らせ

夏季開館時間

夏季休業中の開館時間は下記の通りです。
期間 昭和53年7月10日（月）から9月2日（土）まで。
平日 午前9時～午後5時
土曜 午前9時～正午

「部局図書室連絡会」開かる

標記の会合が前年に引き続き、去る5月30日（火）13時30分より附属図書館大A.V.室において開催され、新しく設置された工学分館を初め全学の部局図書室より約60名が出席した。

館長の挨拶及び一般報告ののち、「主な人事異動の報告と紹介」「（各種）図書館調査等の記入要領について」「図書館資料購入費の予算振替について」「前金払外国雑誌について」「須永文庫目録について」「学術雑誌総合目録について」「部局で作成した雑誌目録の参考掛への送付について」等々図書館業務全般にわたる連絡と報告が行われ、質疑応答及び懇談ののち16時閉会した。

永年勤務者表彰

本学永年勤務者の表彰式が、本学創立記念日の6月22日（木）、松下会館において午前10時から行われた。

この表彰は、本学に通算満20年勤務した者に対し大学長から贈られるもので、本年は全学で90名の該当者があり、本館では会計掛の長南丈夫、企画・渉外掛の田代寛、和漢書目録掛の阿部寿雄の3氏に表彰状と記念品が贈られた。

当日大学の表彰式終了に引き続き、本館においても館友会主催による祝賀会が盛大に催された。

行事予定

- 第10回国連寄託図書館会議
期日 昭和53年9月21日～22日
会場 北海道大学
- 第52次国立七大学附属図書館協議会及び第11回国立七大学附属図書館部課長会議
期日 昭和53年10月11日～12日
会場 大阪大学
- 第33回東北地区大学図書館協議会総会
期日 昭和53年10月19日～20日
会場 福島大学

人事異動

- ・ 和田正信附属図書館長が、工学分館長事務取扱に4月1日付けで発令された。
- ・ 農学分館長に高橋甫教授（農学部）が5月1日付けで併任された。（柴崎一雄分館長任期満了）
- ・ 工学分館長に斎藤秀雄教授（工学部）が、6月1日付けで併任された。
- ・ 附属図書館長事務代理に鈴木泰三医学分館長が、6月26日付けで発令された。（和田正信館長 6月26日～7月7日 外国出張）